

# 技術・家庭科

## 1 技術・家庭科が担う「学力」と「基礎・基本」

### (1) 技術・家庭科の取組

本校技術・家庭科は、学校教育目標を受け、教科の目標を『実践的・体験的な活動を通して、生活と技術とのかかわりについて理解を深め、自主的に進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育みます。』と設定し、技術・家庭科の学習場面で、生徒一人ひとりに「二つのじりつ（自律・自立）している姿」が現れるよう、指導法・評価法の工夫・改善など、教師の授業力の向上に努めている。また、本事業に関わる取組として、生徒一人ひとりの技術・家庭科に対する関心・意欲をより喚起することをねらいとする「課題解決学習」の研究に重点を置いている。

### (2) 技術・家庭科が担う生徒の「学力」と「学力向上」

横浜市教育課程編成の指針 技術・家庭科 には、「技術・家庭科は、生活に必要な知識と技術を実際の生活に一層生かすことができるよう、生活を工夫したり創造したりする能力と実践的な態度を培うという特質をもっている。したがって、「生き方の教育」を推進する技術・家庭科においては、実践的・体験的な学習を通して、様々な人々と豊かにかかわり合い、自分を見つめ、生きる喜びを実感しながら、生き生きと充実した生活を実現しようとする子どもの学びの姿をとらえ、その実現を支えていくことが大切である。」とある。

このことから、生徒自身による成長課題の実現に用いる「学力」のうち、技術・家庭科が担う主な「学力」は、生活を営む上で生じる課題に対して、自分なりの判断をして課題を解決することができる「問題解決能力」「工夫し創造する能力」「実践的な態度」ととらえることができる。

さらに、本校技術・家庭科の担う「学力」は、全教科の学習で実現を図る成長の課題が「二つのじりつ（自律・自立）」であること、教科の目標から次のような視点でとらえていく。

技術・家庭科の学習で身につけた「ことがら（…内容、学び方）」について、  
生活と技術とのかかわりについて理解できる力  
「ことがら」の中から必要な知識・技能を選び・引き出す力  
自らの生活を振り返り、生活を豊かにするために応用し工夫する力

### (3) 技術・家庭科の「基礎・基本」

自らの生活を振り返り、生活を豊かにするために工夫・創造する活動は、個人を主とした活動である。そうした活動を支援するためには、「個に応じた指導」が必要不可欠になってくる。技術・家庭科では「単元」ではなく、「題材」を通して子どもの学びを支援していくので、「個に応じた指導」に適切な題材を選定することが大切である。そうした題材を通して上の から の力を生徒一人ひとりに身につかせるのに

適切な「体験的・実践的な活動」について検討し、具体化していく中で、それぞれの「力」の向上を支える「基礎・基本」は明らかになると考えられる。さらに、これらからの「力」の性質上、新よこはまプランの理念で分析した学習指導要領の内容である「知識・技能」「学び方」「生き方」の三つの基礎・基本とこれらの「力」の関連性を内容構成表を参考に明らかにすることで本校技術・家庭科の学力向上を支える「基礎・基本」はより明確化されると考えられる。

## 2 取組の経過（個に応じた指導で配慮したこと）

とかく技術・家庭科では、生徒も教師も製作（制作）した作品に注目しがちであるが、そうした作品（結果）だけに注目するのではなく、発想（アイデア）、途中経過などにも十分に注目できるよう、平成14年度から製作終了後「完成レポート」を記入させた。この完成レポートは、「どういう考え（発想・アイデア）でこの作品を作ることにしたのか」ということから「特に注目して見てほしい点（アピールポイント）」「製作するにあたって苦労した点」などを記入するものである。その結果、生徒はたとえ途中でうまくいかないことがあっても、最後に自分の作品をアピールすることができるということから、最後まであきらめることなく取り組む姿勢が強くなった。また、この完成レポートを書くことによって、「発想」から「製作」、そして「まとめ」まで落ち着いて振り返ることができた。平成15年度は、こうした完成レポートをもとに、デジカメで自分の作品を写真に撮り、パソコンで自分の作品をプレゼンテーションすることを予定している。このような活動を通して、自分の取組を振り返ったり（自己評価）、互いの取組や作品を相互評価することができ、そうした評価が自己表現や次への学習意欲につながっている。

## 3 指導・評価にあたっての考え方・方針

技術・家庭科における指導と評価は、実生活にどれだけかかわるかということが重要である。これは、生活の自立を図る観点から、ものづくりやコンピュータの活用の基礎的技術の習得とともに、子どもが育つ環境としての家族・家庭の役割や栄養を考えた食生活に関する指導を重視していることである。すなわち、どのようにすれば生活の自立に役立つか、学んだことが自分の生活に生かせるか、さらには、発展的に社会生活や職業への関心等につなげることができるかということである。

よって、本校技術・家庭科では常に実生活を意識した指導、およびいかに自分の実生活を豊かに、そして潤いのあるものにするかという視点を重視して評価している。

## 4 指導・評価にあたっての具体的工夫

技術分野および家庭分野ともに、自分の実生活を振り返ることからすべての学習が始まる。よって、指導と評価は一律的ではなく、その子どもの生活実態に合ったものとな

る。例えば、「ものづくり」では、子どもは自分の生活を豊かにする「もの」の製作をするので、その製作品は様々である。そうした子どもの学びを評価するときは、自分の生活を振り返り、課題を発見する。課題を解決するための製作品を考える。思い描いた製作品の構想を表現する。(製図) 思い描いた製作品を形にする。(製作) 製作品を発表する。(主張) というように、個々の製作品そのものを評価するというよりも、製作を通して子どもが何を学ぶかという大きな視点で評価するようにしている。具体的指導は、平成14年度ははじめに製作の流れを説明し、その後各自のペースで製作実習を進めたところ、進度、内容ともに個人差が大きくなりすぎてしまった。そこで平成15年度は、同じ実習内容を「スモールステップ」に分け、適宜説明を加えながら実習を進めてみた。すると、ほとんど進度、内容ともに差が広がらず、それどころか進度の早い者が遅れている者にアドバイスするなどの姿が現れた。技術・家庭科のような生徒の動きがダイナミックな教科では、教師がすべての個々に対応することが難しいが、生徒同士が互いに学び合うことで、個に応じた指導がしやすい。

## 5 生徒の変容

従来は、一通りの説明を終えた後、個々の習熟の程度に合わせて取り組み、そうした中で個に応じた指導を行っていた。この場合、生徒は自分の取組だけに気持ちが集中し、他の人の取組には無関心であった。しかし、スモールステップで説明しながら実習を進めると、実習の進度にほとんど差がなく、自分の取組と他の人の取組が比較できる時間的余裕ができ、生徒は他の取組から学ぶ姿勢が芽生えてきた。すると、できあがる製作品も従来よりいいものができるようになった。特に、習熟の程度が高くない生徒にとっては、「他から学ぶ」ということが自分の取組に大きく影響しているようである。

## 6 今後の課題

技術分野および家庭分野で学習したことそれぞれが、「点」ではなく「面」として互いに関連しあい、子どもが総合的に自分の生活を捉えるために、より一層の指導計画の工夫が必要である。(学習の総合化)

男女共同参画社会の推進や少子高齢化等への対応については、特に高等学校家庭科において中心的に担う課題であるが、中学生の時期に、幼児への関心をもたせたり、子どもが育つ環境としての家族や家庭の重要性に気づかせたりする学習が重要であるので、そうした指導をより一層意識した指導計画が必要である。

実践的、体験的学習をより一層推進するために、学校内における「疑似体験」のみならず、広く社会一般に学習の場を求める必要がある。そうすることによって、学校における学びがより一層実生活に結びつけることができると考える。

実習の内容に応じて、実習をする際のグループ分けを、男女別か男女混合か、習熟の程度に応じたグループ分けにするのか平均化するかなどによって、学習効果(定着度など)にどのような違いが出るかを検証する必要があるだろう。